

## 6 「学ぶ、かかわる、成長する」

星野欣生（南山短期大学教授）

### 1 生きること＝学ぶこと

#### (1) 学びつづける人間

人の誕生は学びのスタートである。

私たちは母親の胎内から出てきた時、すでに多くの人たちに囲まれている。意識する、しないにかかわらず、また、望むと望まざるにかかわらず、誕生の瞬間から両親をはじめ、周囲の人たちとの関わりが始まっている。相互影響関係の始まりである。乳児は母親との関係で心理的、身体的にさまざまなことを体得していく。多くの場合、その時点では目立たないものであるが、また、母親は、乳児との関わりを通して、「母親」になっていく。こどもを産んだことで、女性がそのまま母親になるものではない。乳児が関係を通して、女性に影響を与えていくことで、名実ともに母親として育てていくのである。男性についても全く同じことが言える。乳児が一人の男性を親として育てていくのである。言い換えれば、乳児、両親ともに相互の関係をとおして、学び始めたと言えることができる。

その後は、その発達段階に応じて、親、親族、友人、先生、先輩や上司など、出会う人たちや、事柄、社会的事件などから、その時々さまざまな影響を受け、あるいは、影響を与えながら、個として成長していく。いわば、学びを重ねていくのである。正しく、「相互学習する存在としての人間」がそこに存在していると言ってよいだろう。

そして、そのような学習は、死の瞬間までつづくこととなる。死こそ、その人の最後の学びであろう。死の床で、私たちは考えつづけるだろうし、同時に、そこに存在していることで、まわりの人たちに、ずっと影響を与え続けるもの

である。どう死ぬかということは、どう生きるかということである。生はそのまま死を規定する。出生を学びの起点とすれば、死は学びの終点である。そこにこそ、「生涯学びつづける存在としての人間」がある。

## (2) 学ぶこと＝成長すること

一般的に言って、学ぶことは勉強することであると考えられている。それは、学びは学校でなされるものである、と思われているからだろう。私たちのイメージの中に、学校＝勉強、勉強＝頑張る、という構図がしっかりはめこまれていることを、否定することは困難である。それは確かにその通りであるが、その範囲内でしか考えられていないところに問題があるのではないだろうか。現代の日本の子どもたちは、「勉強」に明け暮れる毎日を過ごしている。「勉強」というレールからはずれることは、おちこぼれとして扱われかねない。そのことは、日本の家庭においても同様である。それは、学ぶことは知識を獲得することであるという基準が私たちの社会に強く根ざしているからであろう。また、いま少しずつ変化しつつあるが、学歴社会ということもその一因と言える。その結果として、現代の若者は、自分で物事を考え判断したりすることが出来ない、と巷間言われるところである。

いま、私たちは、学ぶこと＝勉強から、学ぶこと＝成長することへの転換を計らねばならない。知識を獲得することのみが学ぶことであるという考えから、もっと広く、人間として成長することが学びであるという考えに。知識の獲得はそのごく一部に過ぎないと言ってよいだろう。成長の基準は一人一人のものである。社会的に統一した基準を設けることは危険なことである。いわば、一人一人が、終生かかってどのように自己実現出来たかということ（その物差しはその人自身のものであるが）でしか、計ることは出来ないだろう。学ぶことは、結果ではなく、過程であるとするならば、自分の周りで今起っていることに目を向け、そこから学んでいく方法を身につけること、言い換えれば、「学び方を学ぶ」ことが肝要であり、その方法を体得しながら、同時に自己成長がはかられていくことになる。そこに「自己実現していく存在としての人間」の姿がある。

## (3) 学ぶこと＝楽しむこと

学ぶことが勉強することであるというイメージからすると、どうしても学びは苦痛につながっていく。苦痛がよくないと言うわけではないが、私たちは楽しみながら学ぶという習慣を持っていない。その意味で、学ぶことは苦痛であるというイメージからの脱却を計らねばならない。尤も、学ぶことは、決して楽をすることではないことを断っておかねばならないが、「楽しむ」とは自

己開放が出来るということである。リラックスして、あるがままの自分を、その場に置いた時に、学びは深まっていくのではないだろうか。自己を開放することは、学びの基本であると考え。そのために、学習の場づくりがきわめて重要なテーマになる。

## 2 人間関係と学ぶこと

### (1) 学び方のさまざま

#### ① コンテンツとしての学習

学ぶ内容に焦点をあてた学習方法である。その代表的なものとして、聞くことと読むことをあげることが出来る。

「聞く」は、主に第三者の話あるいは講義を聞くことである。研究者から市井の人まで、それぞれの専門領域に応じて、その人の話を聞くこと。いわば、他者の声に耳を傾けることである。他者の業績や経験したことを、その人の声を通して学ぶことである。多くの場合、一対多数になるので、対話的なかわりを持つことは難しいが、その人と直面することが出来るし、直接学ぶ人の内面に働きかけることが可能である。それは、話す人の伝え方が大いに影響するものであるが。ただ、何れにしても学ぶ人の姿勢は受け身である。一方的に耳を通して入ってくるものを、受け入れていくことになる。知識の量を増やしたり、間接的ではあるが、考え方の巾をひろげるのに役立つ方法である。

「読む」は読書すること。先人の残したものの、他者の思索から生み出されたものを、書物、文献、報告書などを読むことによって、自分のものに積み重ねていこうとする。他者の文章に触れることで、私たちはさまざまな刺激をうける。その人の内面にそのまま働きかけてくるものである。知識の習得とともに、学ぶ人の思索を促進することになる。

「聞く」「読む」ともに、どちらかと言えば、そのこと自体はひとりでする学習である。聞くこと、読むことだけに留まると、知識の獲得に重点が置かれるということになってしまう。次に述べる「考える」ということが、同時的に始まらないと学習が完結しないことになる。ただ、後でふれるが、グループで他者の話を聞いた上で話し合ったり、グループで読書をするとなると、学び方の形は変わってくるが。

### (2) プロセスとしての学習

ここでは、学ぶ内容（コンテンツ）だけでなく、自分や他者との関係を通して学ぶ学び方を考えてみたい。

### ① 考える（思索）こと

他者から得た知識や刺激をもとに、あるいは、自分の内で起っていることをもとに、自分に語りかけてみる。そのことが自分に与えた影響に目を向けること。いわば、自己内コミュニケーションを積極的に展開することである。誰でもしていることとも言えるが、単独の作業であり、必ずしも日常的であるとは言えない。自己の内面に深めていくことであり、容易なことではない。そのためのトレーニングが必要であるし、普段の学習態度、つまり、能動的な学習の場を経験していることから、考える態度が生まれてくるものであると言えるだろう。

### ② 関係から学ぶこと

他者との関係から学ぶことである。他者が特定の一人の場合、対人間のプロセスからということになり、他者が複数の場合、グループのプロセスから学ぶことになる。ここでプロセスというのは、関係的過程というもので、単なる時間的経過のみを意味するものではない。「～と～の間で起っているさまざまな事柄」と言うことができる。他者やグループとかかかわっている時に、自分、他者それぞれの内面で起っている事柄のみでなく、両者の間で、あるいはグループの中で生起していることを言う。それは、知識などのコンテンツと対比されるものである。自分や他者のありように関する事、相互の理解に関する事、関係の形成や相互影響関係に関する事など、いわば生きるということに、直接かかわることである。そこに起っている社会的相互作用が学びの原点である、何らかの形で関係が生まれているところに、学びの源があると考えてみることである。言い換えれば「人と人との関係が学びの源泉」である。そのように考えると、これはきわめて日常的である。私たちが生きているかぎり、どのような些細な事柄からでも、周りで起っている事柄から学ぶことが出来る筈である。意識すると意識しないにかかわらず、人は出生後さまざまな人たちとのかかわりの中で育ってきている。その意味で、人が成長するということ＝関係の成長ということが出来るだろう。

## (3) 人間関係から学ぶこと

前述したように、人は関係の中で学び、成長していくものである。ここでは、学びのリソースとしての個人とグループのことを考えてみる。

### ① 学習のリソースとしての個人

人はさまざまな枠組を持って生きている。ここで枠組というのは、その人の属性ともいえるべき社会的背景から、態度、行動傾向、ものの見方や考え方、価値観、欲求、動機なども含めている。この枠は人それぞれであり、一人一人異なっているものである。それは主体性、独自性といった言葉で表すことが出来

るだろう。

このように異なっていることが、学習のリソースとしての存在理由であるが、私たちの普段のかかわりは、どちらかという、異なりに目を閉じて、自分と同じところに目を向け勝ちである。異質関係よりも同質関係に関心を向けている。具体的に言えば、相手のカードに自分を合わせていく、そうすることで、争いや葛藤を避けることが出来るからである。異質のカードを持っている筈だが、それは隠したままで、相手に同調していることが多いものである。それは生活の知恵といってもよく、円滑な関係を保つためには必要なことであることは言うまでもない。しかし、同質関係は学びにつながっていかない。

人が学び始めるのは、相手の異質な部分に触れた時、自分とは異なる部分に目を向けた時からである。それは、異なった存在として相手を認めることである。自分との異なりは、自分が気付いていなかった部分に光をあてるし、自分の持っている可能性を目覚めさせてくれる。それはきわめて刺激的なことである。互いの異質性を認めあうことは、自他の内面に葛藤を生じさせるし、関係に摩擦を起こさせることにもなりやすい。その葛藤や摩擦こそ人を育てる要素である。そして、それを乗り越えるところに、「ほんとうの関係」が生まれてくる。良い悪いではなく、「ほんとうの関係」こそ学びの関係の原点である。「ほんとうの関係」の中で、人は、相互に心を開放しあうことが可能になるし、相互に受容することが出来るようになる。自己開示とフィードバックが自由に行き交うことになる。相互に学びあう関係がそこにある。

## ② 学習のリソースとしてのグループ

人は出生以来多くのグループとのかかわりの中で育ってきている。家族、仲間の集団、職場の集団など、いつも何らかのグループに属して、影響を与えられたり、与えたりしながら成長していくものであることは、誰しも認めるところである。グループは人を育てると言ってよいだろう。

そのように考えると、グループは学びのための宝庫である。と言うのは、グループは3人以上複数の人たちで形成される。そこには、ものの考え方や背景など異なった枠組を持った人がいて、コミュニケーションしあっている。さまざまなダイナミクスがそこにあり、そのダイナミクスこそが、人間形成の主要な要素であるからである。いわば、グループのプロセス（グループの中で起っているさまざまなこと）が学びを促進させる要因であると言うことが出来る。グループ・プロセスに目を向け、それに気付くことがそのままその人の成長につながっていく。例示するならば、グループの中での自分の発言や行動が周りのメンバーに与えている影響に気付くことから、グループの中での自分の行動の仕方について学び、その気付きが次の新しい行動に発展していくことになる。ただ、そのためには、グループが成熟していることが一つの要件となる。成熟したグループとは、グループの中に安心感や信頼感が醸成されていることであ

る。その状況の中では、メンバー一人一人の個性は、十分に尊重されており、それぞれがリソースとして十分活用されている。相互の信頼関係が学びを促進させることになる。相互援助学習の関係が成立しており、その中で、人は学びを一層深めていくものである。その意味で、グループの成長は個人の成長に連動しているということが出来よう。